

[35]

氏名	日比野 晋也
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第97号
学位授与の日付	2023年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	元代全真教研究 —教理形成と教勢の拡大—
論文審査委員	主査教授 吾妻 重二 副査教授 二階堂 善弘 副査准教授 池尻 陽子

論文内容の要旨

日比野晋也氏の論文「元代全真教研究—教理形成と教勢の拡大—」は、金代に勃興した新興宗教である全真教が元代に至ってどのように教理を整備し、また影響力を拡大させていったのかを考察した研究である。開祖王重陽とその直弟子である七真に続く時代において全真教が展開し、一般の人々の中に定着していく様相を多くの資料により跡づけている。

内容構成は以下のとおりである。

序論

第一部 元代全真思想研究

第一章 尹志平期における仏教と内丹説の受容について

第二章 尹志平期における『道德経』注釈について

第三章 牛道淳の内丹説

第四章 王道淵の内丹説

補論 王志謹の教説—尹志平、牛道淳との比較—

小結

第二部 拡大する全真教

第五章 非漢民族の全真教徒について

第六章 元明雑劇における全真教のイメージ

補論 明代雑劇における全真教描写—内丹描写を中心として—

小結

まとめと今後の課題

参考文献一覧

本論文は大きく第一部と第二部に分かれ、第一部「元代全真思想研究」では丘処機の後を継いで教団の運営に尽力した尹志平をはじめ、牛道淳、王道淵、王志謹の著作の検討を通じてその教説が論じられ、第二部「拡大する全真教」では非漢民族の全真教徒および元曲に見られる全真教の姿をめぐって教勢拡大の様相が考察されている。

第一章「尹志平期における仏教と内丹説の受容について」では、馬丹陽・丘処機の門人、尹志平（1169-1251）の語録『清和真人北遊語録』の分析により仏教および内丹の理解を論じる。尹志平は師の丘処機を受け継ぎつつ、心の状態を「平常」と表現し、これを禅の悟りと同一視した上で、内丹術の修行を行う前に保持しなければならない修養と位置づけた。こうして「性」から「命」へという修養過程が整備されたとする。

第二章「尹志平期における『道德経』注釈について」では、経典との関わりを『清和真人北遊語録』内の『道德経』講義をとり上げて考察する。全真教は一般的には経典から距離を置くことを説くが、そのような中で例外扱いされていた経典の一つが『道德経』であった。本章での考察の結果、尹志平は同書の「河上公注」を精読していたこと、また全真教の内丹理解のバックボーンが「河上公注」であったことを明らかにする。あわせて北宋・徽宗『御解道德真経』、蘇轍『道德真経注』が用いられていることも指摘している。

第三章「牛道淳の内丹説」では元後期、13世紀末の牛道淳の内丹理論を論じる。その著作『析疑指迷論』、『文始真経註』の分析によれば、みずから全真教徒と名乗ってはいるものの、その自己修養は「精」・「気」・「神」を変化させていくというオーソドックスな内丹説であること、「命」の修行の比重が増していることから、『悟真篇』に始まる内丹派、いわゆる「南宗」のからの影響を想定する。つまり牛道淳は「先性後命」という全真教における修養順序は守ってはいたが、「命」を重視するという点で、南宗と融合しつつある当時の全真教の思想的変化を示していると結論づける。

第四章「王道淵の内丹説」では全真教の道士とされてきた元末明初の王道淵の内丹思想を考察する。その著作に見える内丹術は「五行顛倒」説を踏まえた従来型の内丹術であり、王重陽ら全真教北宗の人々の名前もまったく出てこないこと、王道淵は李道純に私淑していただけで独力で内丹を修めていたらしいことなどを指摘し、これらは当時、南方における李道純の影響を示すとともに、内丹術の著作が出版されて流通していた可能性を物語るという。また王道淵を全真教徒見るのは困難であると注意を喚起している。

補論「王志謹の教説—尹志平、牛道淳との比較—」では、尹志平と同時代に活動していた王志謹（1178-1263）につき、先行研究をふまえつつその教説を整理する。すなわち尹志平や牛道淳が内丹へと接近したのに対し、王志謹はあくまでも「性」「心」の修養を重視しており、当時の全真教の思想が「心」の修行を重視していたことがわかるとする。

第五章以下は第二部に属し、教理よりも実際の普及状況の一端をとらえようとする。まず本章「非漢民族の全真教徒について」では、女真族の董凝陽の思想と、彼が全真教の系譜にどのように組み込まれたのかについて論じる。董凝陽の内丹思想は全真教的というより旧来の内丹術の影響が強いと指摘し、必ずしも全真教徒とはいえないとする。そして、この人物が全真教の系譜に組み込まれたのは、その教勢が拡大する時期における教団側の要請による結果であろうと見る。

第六章「元明雑劇における全真教のイメージ」では、『元曲選』等に収録された雑劇のうち「任風子」や「劉行首」など、全真教を主題とするいわゆる度脱劇を詳しく考察し、全真教の人物を八仙と同様、仙人と見なしていたこと、登場する道士が「全身冠」という冠を身につけていること、ただし丘処機や尹志平などの教団側にとって重要な人物が登場しないことなどを指摘し、これらは民間と教団の側に認識のギャップがあったことを物語るとともに、誤ったイメージではあれ、元明時代において全真教が民間にかなり浸透していたことを示すという。

補論「明代雑劇における全真教描写—内丹描写を中心として—」は短篇ではあるが、明代に作られた「許真人抜宅飛昇」と「冲漠子独歩大羅天」の二つの雑劇をとり上げ、元代雑劇には見えない内丹用語・思想が重要な要素として用いられていることから、作劇した知識人層に内丹の知識を持つ人物がいたとし、これらは停滞期とされる明代の全真教を改めて検討し直すうえで考慮すべき点であるとする。

論文審査結果の要旨

日比野氏の論文は金代に起こった全真教が勢力を拡大する元代を中心に、その教理と実状を考察した意欲的研究である。主な成果としては次の三点を挙げることができる。

第一に、尹志平や牛道淳、王志謹ら、いわば第三世代の道士たちの思想をとり上げた点である。従来の全真教研究は開祖王重陽およびその弟子の七真が多くとり上げられるのに対して、七真の弟子たちについては手薄であり、したがって元代中期以降の全真教の教理がどのように展開したのかは十分明確ではなかった。本論文はそうした側面に光を当てたものであり、特に尹志平と『老子』河上公注を論じた部分（第二章）は精彩がある。

第二に、内丹思想の研究が注意される。北宋に始まる道教内丹術は主に南宋で伝授され、研究も多いが、金代および元代の全真教においてこの内丹術がどのように受容されたのかの研究は少ない。本論文は牛道淳や王志謹、王道淵の内丹説をかなり詳しく論じており、従来の研究の空白を一定程度埋めることができたと思われる。とりわけ牛道淳と王道淵の検討においては（第三章、第四章）、禅宗との関係や、後の著名な理論家李道純や陳致虚との比較もなされていて貴重である。

第三に、民間への普及に関して、元明の雑劇を用いた点が新鮮である。この方面には従来も一定程度研究があるが、本論文ではそれらをふまえつつ、当時の民間で全真教がどのようにイメージされていたかを具体的に論じており（第六章、補論）、全真教研究において、単なる教理研究とは異なる別の可能性を拓くものとして興味深い。

このように、日比野氏の論文は従来の研究にはない新しい内容を持っている。ただし、教理に関しては内丹思想に偏っており、全真教における内丹（「命功」）と禪的な心の修養（「性功」）との比重に関しては異論もあるので、いっそうの精査が必要であろう。また教勢の拡

大に関しては朝廷との政治的関係や士大夫階層への広がりについても解明の余地を残している。ただしこれらはきわめて大きな課題であり、元代全真教のいくつかの課題を着実に解明したという点に本論文の寄与を認めるべきであろう。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。